

新千年記

2003年1月1日発行 第6号

赤坂野村総合法律事務所 事務所報 発行人 野村吉太郎
〒107-0052 東京都港区赤坂8-6-27 スカイプラザ赤坂311号室
電話 03-3475-0410 FAX 03-3475-0412 E-mail: nomuralaw@ybb.ne.jp
特殊法人監視機構ホームページ <http://www6.xdsl.ne.jp/~nomura/>



新年明けましておめでとうございます。

ごあいさつ

2003年おめでとうございます。

さて、昨年私は4月から日弁連調査室長に任せられ、以降司法改革問題がヤマ場を迎えた時期と重なったこともあって、調査室業務に追まわられた年でした。また、7月末には事務所の引っ越しもありました。11月からは秘書を1名増やして合計3名体制とし、より充実した法的サービスの提供を目指しております。さらに、今年は、新たに事務所紹介ホームページを立ち上げるべく準備しております。

事務所の近況としては以上の通りですが、皆様におかれましては昨年いかなる出来事がありましたでしょうか。

不景気の寒風が吹き荒れております。弁護士という職業は、いわば他人の不幸を飯の種とする部分があります。他人の痛みを分かるような、法律家になれるよう努力しなければと思います。ある弁護士は、「知・仁・勇」を持つ者が弁護士である。弁護士法第1条の精神、弁護士倫理がそれを制度上裏打ちするものであると、熱っぽく語っていました。

「知・仁・勇」、いずれも明文化されたものではありませんが、私もこれを座右の銘として、日々の職務に励む所存です。



一文入魂

野球のピッチャーが一球一球に魂を込めて丁寧に投げることを、一球入魂と言う。弁護士は文章で人を説得するのが命。一文一文を依頼者の気持ちを考えながら心を込めて書き付ける。一文入魂と言ってもよいと思う。

読む人に訴える文章を書くのは困難な作業だし、その上法律の解釈がからんでくると余計にややこしくなる。それを分かりや

すくかつ説得的に書くことは、随分骨の折れる労働である。一方で、手を抜こうと思えば、比較的簡単だ。マニュアルをそのまま引き写し、ほんの少し手を加えたりすることで、用が足りることはままある。しかし、そこで安易な道に流れず踏みとどまって文章を吟味することが大事のように思う。

私が破産管財人をやったある事件で、申立代理人の報告書に次のようなくだりがあった。それは、困窮した申立人が予納金納付のために実母から借乳して金〇〇円を借りたというのである。一瞬目を疑ったが、確かに「借乳」と書いてある。よく考ええると、「借入」をワープロで変換間違ひしたのだらうと思われた。母なるが故に乳かと想像したが、偶然の一致にはおもしろいやら、情けないやら。他山の石としたい。



日弁連調査室とは何か

日弁連調査室を一言でいうと、弁護士制度に関する日弁連のシンクタンクである。現在は、弁護士嘱託11名(有給の非常勤職員)で構成され、弁護士会館16階南西フロアにて執務している。

日弁連調査室が担当している実際の業務は、以下の通りである。①会員又は一般からの電話による照会に対する回答 ②文書照会・諮問に対する回答・答申書の作成 ③条解弁護士法、業務ハンドブック、懲戒手続関係本等の執筆、編集 ④弁護士会の会則等点検 ⑤正副会長会、理事会、弁護士制度改革対策本部の各部会、弁護士制度関連各種委員会及びワーキンググループ出席 ⑥日弁連総会対策会議出席 ⑦弁護士白書編集 ⑧日弁連被告訴訟事件担当 ⑨懲戒処分公告(「自由と正義」掲載分)作成(但し、昨年4月以降) ⑩日弁連総会、弁連

大会出席・報告書作成等である。

今、司法改革関連の動きが全面展開されていることから、日弁連調査室嘱託はこれに対応するべく昨年4月から5回の会議を行っており、夏には泊まりがけの合宿もある。今年は、日弁連会則を改正して名称を変更することが検討されており、名実ともに弁護士制度に関する日弁連のプレーンとしての活躍が期待されている。

声に出して読みたい日本語

昨年「声に出して読みたい日本語」の本がベストセラーになった。あまのじゃくの私は、逆の意味で声を出して読みたいものはどんなものがあるだろうと考えた。ありました、とっておきのもの。裁判官が書いた判決書。敗訴判決だと余計に読みたいなくなる。ただ、勝敗は別にして、とかく判決文は読みにくい。

まず、一文が長すぎる。読んでいて事実の背景やストーリーが浮かんでくるような文章がない。無味乾燥でガイコツのような事実認定を並べ立て、自分の持っていた結論にいびつな筋肉を盛ったような判決文が最近目に付く。特に、東京高裁の判決には奇異なものが多いのではないかと。

地方の弁護士会では、あまりにひどい裁判官に対しては栄転決議をすることがあると聞く。でも、東京の場合はどうしたらよいらうか。キャリア裁判官の事実認定に狂いが生じていると言ってよいと思う。事実認定のプロとしての自負が過信に、そして曲解認定を生むのである。弁護士会はこの問題を実証的に収集・研究して広くアピールすべきである。





3万人のオビチュアリー

7年前、私がイギリスに滞在していたときに、新聞を読んでいて目に止まった記事があった。それは、Obituary（オビチュアリー）と呼ばれ、故人の業績、生き方を追悼して客観的に書かれた囲み記事であった。偶々、日本の福田元首相の記事が写真付で出ていたもので、私には目新しく思えた。最近、朝日新聞でも同様の企画記事を見かけるようになった。ただ、いずれにしてもいわゆる著名人の故人を偲んでの記事である。しかし、世の中で追悼記事を書いてもらえるような人は多くない。

「自殺って言えなかった」（サンマーク出版）を読んだ。自死遺児の文集である。この文集は、オビチュアリーではない。しかし、遺された子供の心の痛みがひしひしと伝わってくる。自死遺児の進学を支援するあしなが育英会が、遺児の「自分語り」、すなわち苦しい胸の内を吐露することを「いやし」活動の一環として行っている。この文集はその中からまとめられたものだ。

日本の自殺者は最近4年間で毎年3万人にもものぼるといふ。1日あたり82人ということになる。あしなが育英会の推計では、1日あたり33人の自死遺児が生まれているという。自死の原因の中でも経済的理由に基づくものは少なくない。自己破産等の法的制度を知らない人、制度は知っていても手続きをどうしたらよいか分からない人、弁護士費用のない人、様々であろう。

自死遺児をこれ以上増やさないための対策が必要だ。弁護士会としても政府まかせではなく、対策を打ち出すべきではなかろうか。



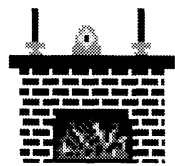
マシュマロと暖炉

先日、子供達と一緒にテレビ番組の「ちびまる子ちゃん」を観た。

小学生のまる子は、暖炉のある大邸宅に住む同級生から、暖炉であぶって食べるトロリとろけるマシュマロの味はこの世のものとは思えないほどの至福の味と聞く。

まる子は、お母さんに暖炉で焼いたマシュマロが食べたいとおねだりするが、まる子には暖炉などあるはずもなく、あえなく却下。あきらめないまる子は、おじいちゃんにそのような至福の味を知らずに人生が楽しかったかと、けしかけろ。お調子者のおじいちゃんは、まる子と共同戦線を組み、レンガを積んで家の中に暖炉を作ろうとするが、これも大目玉で却下。

しかたなく、寒風吹きすさぶ庭でレンガをコの字に積み、たき火のごとき暖炉もどきを作成。竹串に刺したマシュマロをたき火にかざすが、油断しているうちに、串もマシュマロもこげてしまい、マシュマロが落ちそうになる。あわてておじいちゃん



がマシュマロを口に入れようとするが、とけたマシュマロが唇に落ちてアッチッチッ。

おじいちゃんの唇がはれてマシュマロみたいになっちゃった。

思わず吹き出した私を見て、娘から「パパが一番笑ってどうするの。」と言われてしまいました。マシュマロと暖炉の話は新聞で読んだことはありますが、私自身、その至福の味を体験しておりません（もちろん、我が家には暖炉なし）。体験談募集いたします。

編集後記(私書編)

昨年、家族で沖縄・宮古島を旅行しました。旅行中、宮古島北部にある池間島でグラスボートに乗り、珊瑚礁を堪能しました。

グラスボートを操縦してくれたおじさんによれば、池間島の海の珊瑚礁が沖縄一美しいが、エメラルドグリーン色の海は美しいように見えて死んだ海だと教えてくれ

ました。海がエメラルドグリーンに見えるのは、死んだ珊瑚のくずが白く海底に沈んでいるからだそうです。

池間島の海は、一見深いブルーとエメラルドグリーン色の2色のコントラストを作っていて、私には自然の神秘的な模様に見えるのですが、本当は自然破壊によってこのようなことになっていると知り、かなりショックを受けました。



年々沖縄の珊瑚礁も死んでしまう部分が広がっているとのこと。何とかこの深いブルーの海を守ることはできないかと思われました。

ちなみに、この日は風が大変強く波もかなりあったため、すっかり船酔いしていました・・・。（小坂）

先日、自宅付近の横断歩道で信号待ちしていると、横断歩道を挟み、向かい側に自転車に乗ったおじさんが、キッ!と急ブレーキで停車。気になったのは、おじさんの肩に乗っている、白い何か。信号が変わり、横断歩道を渡る私の横を自転車で飄々と走り去るおじさんの肩を一瞥。・・・っえ?一瞬我が目を疑いました。白い何かとは、巨大なウサギだったので。子ウサギではなく、



成長しきった大型の真っ白なウサギ。おじさんの急ブレーキに微動だにせず、バランスを取りながら堂々たる乗りっぷり。え

え、かなり熟練していると見ました。でも・・・ウサギって・・・肩に乗るんですね・・・。（太田）

来年、家をリフォームする計画があります。私の生まれた年に建った今の家とは、同じ時間を共有してきました。そんな家がなくなってしまうのは寂しいですが、新しい家との再出発をするのだと思って、いろいろな事にチャレンジしていく年にできればと思います。（藤井）

